

『愛』ってやつを考えてみた

新卒で入職したのは、小学校だった。期限付きの公務員だったが、司書として充実した四年間であった。

そこで、聖書について教えてくれたおじいさん・アベ先生と出会う。ごま塩頭で猿顔の軽業師のように機敏な彼。柔和な笑顔が特徴的だった。用務員として在籍していたが、多方面で能力が高く、まわりから頼りにされていた。ゆうに四メートルは超える木に登って剪定し、率先して声をかけ、児童に課外授業などの際、色んなことを経験として教えていた。個性的な教員揃いのなかにおいて、アベ先生はみんなから厚い信頼を寄せられていた。教諭や栄養士の先生らにも勧めてはいたが、聖書に関心のある方はいなかったように記憶している。いい方なんだけど、聖書の話はいいかな、という感じがありありと出ていた。

彼は六十は過ぎていたはずだから、我々の年の差は四十歳ほど。

時間を見つけては、私に声をかけ聖書を広げ、一節を読み、教えを説いてくれていた。

「先生、ここにはこういう風に書かれているんですよ」

「ふむふむ」

「読んでみて下さい」

「ありがとうございます」

という感じで、職場で時間があれば聖書を開く日がつづいた。

固有名詞が目飛び込んでくる。その人が何と言ったか、とか、誰々への手紙とか、色んな人が何かを言っている、それをまとめたモノなのか、と思った。神様についてのことだけじゃない、という点が面白いと思った。

小説の肥やしになる、と判断した私は、聖書について学んでみようかと思うに至った。読むというより開いて目で追う。知らない人の知らない言葉を聞いてみる、そんな感じだった。

特に記憶に残っている節は、愛について語られる言葉だ。コリント人への第一の手紙十三章四〜七節。犠牲の伴わない愛について書かれている。【愛は寛容であり、愛は慈悲深い。

……愛は決して絶えることがない。】

何度も読んでいくうち、自分が感情的に動いていたことや謙虚でなかったところなどが俯瞰で見えてくるようになった。

人生のなかで、愛について語る機会は少ない。愛の言葉は世のなかに溢れているけれど、愛について考える機会がない人も多いだろう。若い時は、結婚できるのかと不安になり、付き合う人ができるとこの人でいいのかとまた不安になる。子供ができると将来に不安を覚え、できるだけのことをやりたくなる。ともかくにも先のわからないことに不安を覚えがちだなあと考えた次第。『愛』については、若い時はあまり考えないにもかかわらず、生まれた時からずっと求めているものだとも思う。

結婚し、子供がお腹にいる今、愛ってやつを考えてみる。

愛をもって自分を制す、という言葉が浮かぶ。感情的に動くのは不利だ、という大人な考

えもある一方、誰かを助けてあげたいというある意味一方的な考えで動くときもある。そしてそこに何も期待しないというのがいいのかもしれない。愛はここにあって、自分を支えている。そういうものなのかもしれない。